第3287号

教育新聞

週2回 月・木発行
発行所 教育新聞社
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町 1-40
代表 ☎ 03(3295)7051
〔購読申し込み・お問い合わせ〕
http://www.kyobun.co.jp/
〔購読料・月額〕2,500円＋税
©教育新聞社 2014

子どもの多様な見方を生かす社会科授業

第3回

玉川大学教育博物館研究員・玉川大学講師
多賀 譲治

教師自らが探究心を持つ

「髪の毛ボサボサ、ゴワゴワの服と毛皮に裸足」。

これが多くの子どもが持つ縄文人のイメージだ。無理もない。縄文時代といえば1万年前から数千年間続いた時代で、文字は無く、人々は竪穴住居に住んでいた。人々は山野で獣を狩り、木の実や野草を採り、海や川から魚介を得ていた。

ところが近年になり、発掘の成果は、そうした概念を次々と打ち破っている。縄文時代を代表する三内丸山遺跡では栗の栽培が確認され、色つきの組紐や畑作に使ったと思われる耕作棒が発見された。

富山県桜町遺跡から出土した朱塗りの水差しは「祖先から受け継いできた技法そのもの」と現代の塗師を感動させた。漆器の出土は多く、木器はもちろん土器や装身具にまで及ぶ。各地で発見された朱塗りの櫛は髪を梳き、結わえてある。

岡山県の朝寝鼻貝塚では、出土した土器の胎土から稲独特の細胞「プラント・オパール」が発見された。少なくとも縄文時代前期には日本に稲があったのである。福井県の鳥浜貝塚に住んでいた人々は木器の種類と用途によって樹種を替えており、ノコギリもないのに板を生産していた。これらはいずれも6千年以上も前の出来事でいたことの証明でもある。鳥浜貝塚では出土した糞石の分析で、植物食と動物食をバランスよく摂取していたこともわかった。

さて私は、このような豊かで高い技術を持った縄文人が、コーヒー袋に穴をあけたような服装だったとは到底思えなかったのである。そしてその答えはあった…それは日本各地の遺跡から発見された鹿角製の縫い針である。

昭和40年、千曲川支流の相木川を足下に見る栃原岩陰遺跡から現代の木綿針とほとんど変わらない精巧な縫い針が何本も発見された。

これらは革を縫うための針と紹介されているが、わずか3㌢足らずの細く短い針で、丈夫な革を縫うことには無理がある。革を縫いあわせるには、石錐と呼ばれる石器で穴をあけて、それから革紐や腱から作った糸をとおす。その場合の針は太く丈夫であり、先端はさほど鋭利ではない。実際にそのような石器も針も見つかっている。

また各地の泥炭遺跡から発見された編布という目の粗い編み物には、糸で縫った形跡はない。おそらく編み物の基本が編み込んでパーツをつなぐことから、編布もそのようにされていたのであろう。縫い針の発見はその後も続き、新潟県では色のついた糸も発見された。精巧な針に見合った織り布の発見は時間の問題で、縄文人のイメージも、これからどんどんと変わっていくことだろう。

ところで、このような疑問と推理のタネは本や教科書の中にいくらでもある。「教科書や指導書を鵜呑みにせず、教材は自分で考え、研究して作る」とは、再三にわたって述べてきたことだが、教師自らが既成概念に捕らわれず、疑問が湧いたら納得がいくまで調べてみることだ。たとえそれが解決しなくても、子どもの目を育てることに通じる。